

# 平成21年度 【 学園研究費助成金< B > 】研究成果報告書

学部名 教育学部

フリガナ キヨシ ヨウコ  
氏名 清 葉子

研究期間 平成21年度

研究課題名 大学が発信する子育て支援(1)～学生が参画する子育て支援の取り組み～

## 研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	清 葉子	教育学部	講師
研究分担者			
研究分担者			

## 1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

これまでの養成校主催の子育て支援事業は、多くの場合、学生参加型であっても企画運営は教員が行い、学生はそれに従って活動する取り組みが多いといえる。しかしながら、真の実践力養成のためには、支援事業の計画・準備の段階から学生を参加させる必要があるだろう。そこで、今年度の実践は、学生が主体となって、プログラムを計画・準備することから始めた。ただし、技術的・理論的に未熟な学生主体のプログラム企画および運営は、事業の質的な低下をもたらす危険性を内包しており、学生の学びとしては重要であっても、本来の目的である子育て支援が達成できない可能性が出てくる。そのため、実施後の検証をきちんと行う必要がある。以上の問題意識から、本実践の目的は、以下の2点とした。①学生主体の子育て支援事業プログラムは、これまで行ってきた教員主導のプログラムと比べて参加者の評価はどのように変化したかを検証する。②本実践の計画・準備過程と実施結果から、保育者養成課程における子育て支援事業が学生に及ぼす教育効果を検証する。

## 2. 研究方法等 (300字以内で記述)

### 実践計画

教育学部内外において月に2回程度、子育て支援事業を計画・実践した。教育学部で行った事業は、集いの場を親子に提供する「ひろば型子育て支援」の形式で行った。「ひろば」とは、「親子が誰でも気軽に訪れることができる自由な居場所」<sup>1)</sup>を示している。まず教育学部棟内に親子が集える部屋を用意し、子どもたちの遊びの場、親同士の仲間づくりや情報交換などを行う交流の場にした。さらに学生を中心とした支援者は、親子あそびプログラムを提供する形での支援活動を実施した。学生は、実践ごとに実践を主導するグループと実践をサポートするグループとに分かれ、学生同士がお互いの実践を見合う機会とした。

### 参加者・学生へのアンケート調査

学生主導の子育て支援事業の実践への評価を行うために、参加者には、初回参加時と、実践後半にあたる7月1日、2日にアンケート調査を実施した。

参加学生には、実践が終了した12月に、子育て支援事業に参加した感想を自由に記述してもらった。

### 3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

#### 学生主導の子育て支援事業に対する参加者の評価

今回の参加者は全員が、大学が企画する子育て支援に魅力を感じると回答した。その理由として記述されていた内容は、学生とのふれあいをあげる回答が多かった。学生参画の子育て支援が参加者の魅力の一因にもなっていることを読みとることができた。今回のアンケート結果と昨年度のアンケート結果を比較してみると、参加者の満足度は昨年同様高いものとなっていた。今年度は、学生主体で考えた子育て支援プログラムを中心に実践を行ってきたが、これらに対して参加者からの評価が得られたことが明らかになった。つまり、学生が企画した子育て支援プログラムでも、参加者の満足度に相違はなかったといえる。

#### 活動に参加した学生の声から

実践後、学生には感想を自由記述で記入してもらった。学生の感想は、「1.子育て支援の実際を知ることができた」、「2.子どもの発達や遊びの様子を具体的に知ることができた」、「3.親子の両方に関わることができた」、「4.子どもの年齢に応じたプログラムを立案・実践する経験ができた」の4つに大別することができた。今回は、学生の学びについては、自由記述のみの分析となってしまった。今後は、学生の満足度だけではなく、学生の学びや課題を様々な角度から分析できるような質問紙を作成し、学生の実践の成果と弱点を明らかにし、指導に活かしていくことが必要である。この点を、今後の課題としたい。

#### まとめ

学生が、子育て支援事業にかかわっていくということは、現在の保育者養成の課題のひとつでもある次世代育成支援と保護者支援のできる保育者の養成につながっていくといえる。学生が、学内のみならず地域での子育て支援に参加するということは、集まってくる親子の様子やニーズを知るきっかけにもなり、地域子育て支援の実際に触れる大変良い機会である。また、それらの場で支援者が行っているプログラム内容や親子への援助の姿を見ることで、今後の活動へのヒントを得たり、学ぶことも多かった。時には、学生が実践をする姿を見て、依頼機関の保育者等から声の出し方や、活動の進め方等のアドバイスや講評を受けることもあった。このようなことを通して、学生が活動を反省し、今後の課題を見出したり自信をつけたりすることができた。子育て応援キャラバン隊の学内外での子育て支援活動は、学生の経験を積む実践の場として、実践的な応用力をつける有意義なものであった。

これからも、保育者を養成する教育学部の「特色ある教育活動」として、地域社会への貢献と実践力を兼ね備えた保育者の養成のために「子育て応援キャラバン隊」の実践と研究を継続していきたい。

### 4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①子育て支援	②保育者養成	③学生参画	④子育て応援キャラバン隊
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

清葉子

「保育者養成課程における学生主導型子育て支援の実践

- 相山女学園大学教育学部「子育て応援キャラバン隊」の2009年の取り組み -」

相山女学園大学教育学部紀要 Vol.3,2009.3 現在製本中のため、ページ数不明